

高齢者夫婦の同伴行動

— “ぬれ落ち葉” 仮説の検証 —

古谷野 亘, 西村 昌記, 水嶋 陽子, 矢部 拓也

第 48 回日本老年社会科学大会一般報告, 2006.6.

【目的】 夫婦単位で行われた調査のデータを用いて、都市の高齢者夫婦における配偶者への依存と同伴行動について検討することを目的とした。

【方法】 調査は、2003 年 3 月に、東京都小平市に居住する夫婦のみ世帯の高齢者夫婦 400 組（夫の年齢が 70～79 歳）を対象として、訪問面接法により実施された。調査対象者の選定は住民基本台帳からの無作為二段抽出によった。夫婦ともに回答を得た有効回収率は 270 組、有効回収率は 67.5%であった。

本研究では、夫婦とも移動能力に支障のない夫婦 242 組を分析対象とした。分析対象者の年齢は、夫が 70～79 歳、平均 73.9 歳、妻が 61～82 歳、平均 70.3 歳であった。夫の最長職は 86.4%が雇用者で、調査時の有職率は、夫で 21.3%、妻では 14.9%であった。

【結果】 配偶者への手段的依存（「妻／夫がいなくて身の回りのことで困る」）は妻より夫で強く、夫自身がこのことを認めている夫婦が多かった（表 1）。配偶者への依存について夫婦の認識の差は小さく、「配偶者との仲」に満足している者が多かった。

夫婦の同伴行動の頻度は全般に高くなかった。しかしそれにもかかわらず、同伴行動の回数を増やすことには否定的な夫婦が多かった（表 2）。夫のみが同伴

行動の回数を増やすことを望んでいるケースは少なく、妻のみが回数の増を希望している割合と異ならなかった。夫の職業の有無による差はほとんどなかった。

【考察】 男性高齢者は配偶者への依存度が高く、“ぬれ落ち葉”のような存在になるとのステレオタイプがある。本研究においても、日常生活における配偶者への依存度は妻より夫で高く、夫が“ぬれ落ち葉”になる可能性のあることが示唆された。しかし、夫婦とも結婚満足度は高く、同伴行動についても現状に満足し、現状維持を望む夫婦のほうが多かった。夫が同伴行動の回数を増やすことを望んでいるのに妻は忌避しているというケースは少なく、その意味で“ぬれ落ち葉”仮説を支持する知見は得られなかった。

表 1 妻／夫がいなくて身の回りのことで困る (%)

	夫婦とも肯定	夫のみ肯定	妻のみ肯定	夫婦とも否定
夫について	55.0	11.2	14.0	19.8
妻について	12.4	14.5	14.1	58.9

表 2 同伴行動の頻度と頻度を増やすことについての希望 (%)

	頻度				回数を増やすことについて			
	週に 1 回以上	月に 1 回以上	年に 1 回以上	ほとんどない	夫婦とも肯定	夫のみ肯定	妻のみ肯定	夫婦とも否定
外 食	9.1	40.9	26.4	23.6	9.9	12.8	14.9	62.4
別居子訪問	4.9	14.8	50.7	29.6	6.3	8.6	6.8	78.3
映画・行楽	0.0	11.2	48.8	40.1	17.8	15.7	14.5	52.1
旅 行	0.0	3.7	66.1	30.2	20.7	16.9	16.1	46.3

高齢者夫婦の同伴行動

— “ぬれ落ち葉” 仮説の検証 —

古谷野 亘
西村 昌記
水嶋 陽子
矢部 拓也

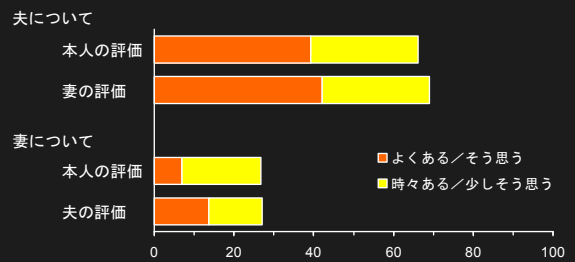
方法

- 調査は、2003年3月に、東京都小平市に居住する夫婦のみ世帯の高齢者夫婦400組（夫の年齢が70～79歳）を対象として、訪問面接法により実施された。調査対象者の選定は住民基本台帳からの無作為二段抽出によった。
- 夫婦ともに回答を得た有効回収数は270組、有効回収率は67.5%であった。
- 夫婦とも移動能力に支障のない夫婦242組を分析対象とした。

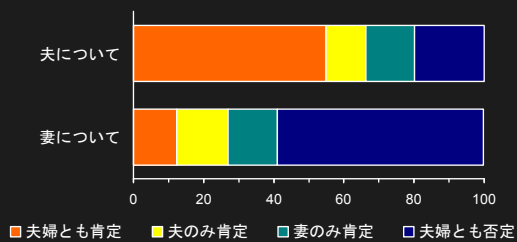
分析対象者の属性

- 分析対象者の年齢は、夫が70～79歳、平均73.9歳、妻が61～82歳、平均70.3歳であった。
- 夫の最長職は86.4%が雇用者で、調査時の有職率は、夫で21.3%、妻では14.9%であった。
- 老研式活動能力指標の得点は、夫が6～13点、平均11.4点、妻が7～13点、平均12.1点であった。

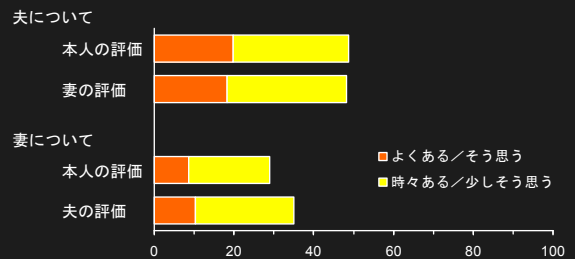
妻／夫がいないと身の回りのことで困る (手段的依存)



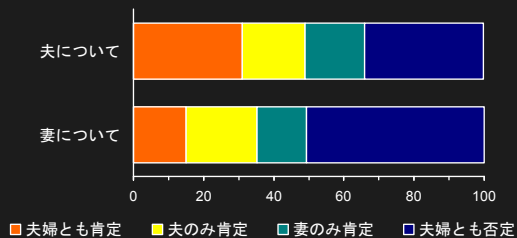
妻／夫がいないと身の回りのことで困る (手段的依存)



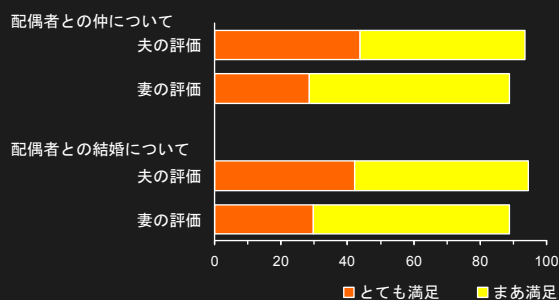
妻／夫がいないと落ち着かない気分になる (情緒的依存)



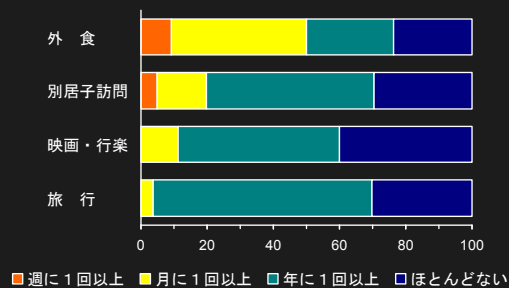
妻／夫がいないと落ち着かない気分になる (情緒的依存)



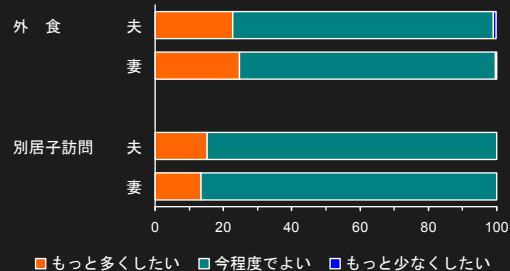
結婚満足度



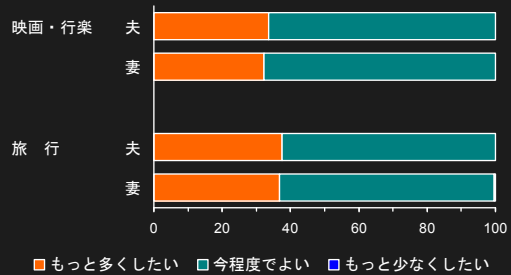
同伴行動の頻度



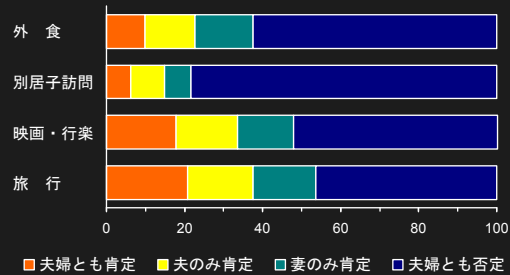
同伴行動の増減についての希望 (1)



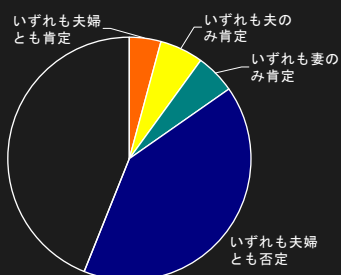
同伴行動の増減についての希望 (2)



同伴行動を増やすことについて



外食と映画・行楽を増やすことについて



まとめ

- 日常生活における配偶者への依存の程度は、妻より夫で強く、夫が“ぬれ落ち葉”となる可能性のあることを示した。
- しかし、多くの場合、夫自身が妻への依存を認識しており、妻の認識と大きく異ならなかった。
- そして、夫・妻とも、そのような「配偶者との仲」に満足している者が多かった。

- 夫婦の同伴行動の頻度は高くなかった。しかし、同伴行動の増加を望む者は、夫婦とも多くなかった。他方、同伴行動の減を望む者はほぼ皆無で、多くが現状維持を望んでいた。
- 夫が同伴行動の回数を増やすことを望んでいるのに妻は忌避しているというケースは少なく、その意味で“ぬれ落ち葉”仮説を支持する知見は得られなかった。